書評

安直哉 著
『国語教育における形象理論の生成と展開』

勝　田　　光※

1．国語教育におけるバイエル

ピアノを習うときは「バイエル」から始めますし，柔道を習うときは受け身の練習から始めます。では，国語教育を専攻した学生はなにから始めるのでしょうか。もちろん，「私はいきなりトトロの『さんぽ』から始めた」という方もいるでしょうから例外はありますが，多くの方は垣内松三が提唱した形象理論の勉強から始めることが多いのではないでしょうか。典型的な国語の授業として，（1）先生が「ごんぎつね」を音読するのを聞いて感想を書く，（2）語句の意味を調べたりごんの気持ちについて話し合ったりする，（3）再度，「ごんぎつね」の感想を書いて読みの深まりを実感する，というものがありますが，これは形象理論に基づきます。今回，書評で取り上げるのは，この形象理論を主題とした著書です。もし形象理論をご存知なければ，まず世界教育学選集の一冊『形象と理会』（1970年，明治図書）の編者解説「垣内松三の人と業績」（横須賀薫著）をお読みになることをお勧めいたします。

まず，本書を一言で粗雑にまとめれば，「形象理論をめぐる様々な資料を紹介し，私たちが形象理論をより深く理解するために，著者自身の解釈によって手引きした本」と言えるでしょう。本書では，形象理論をめぐる様々な問いが検討されています。例えば，（1）なぜ形象理論が現場に受け入れられたのか，（2）垣内松三は，ウィリアム・ジェームズの著作からどんな影響を受けたのか，（3）形象理論はどのようにして生まれたのか，（4）実践家は形象理論をどう受けとめたのか，（5）形象理論の本質は何か，といった問いです。これらの問いのいずれかに関心を持たれた方は，ぜひ本書を手にとりその問いが追究されている章から読むことをお勧めいたします。私はそのような読み方をしましたし，前の章を読ん

※筑波大学

でいないと内容が分からないということはないと思います。

以下の節では，そのような読み方をした私が「おもしろい」と思った箇所を取り上げて感想を述べていきます。本書の体系的なレビューあるいは先行研究との関係からみた本書の評価については，村井万里子先生が全国大学国語教育学会の学術誌『国語科教育』第78集（2015年）に執筆した書評をお読みください。本書評は，「国語教育の実践・研究に丁稚として携わりながらも，歴史研究は全くの門外漢」という立場からの一感想に過ぎないことをご容赦ください。

２．歴史研究における実証

私はこれまで教室に赴いて映像や音声を記録し，それを素材に論文のようなものを書いてきましたので，誠に素朴ではありますが「歴史家は自分の主張をどうやって検証するのだろう」と疑問を抱いていました。本書の第15章「錬成主義国語教育の系譜」を読んで，その手法の一つを学ぶことができました。

第15章は，戦中の国語教育の指導法を対象にしています。本章の問いを私なりに述べれば，「戦中という特殊な状況下で教育の目的が変化したにも関わらず，指導法がこれまでと同じということがあるだろうか」という先行研究への異議申し立てです。垣内松三の『国語の力』が大正11年に刊行されたことにより，一つ一つの語の理解から出発する指導法が，文章全体の把握から出発する指導法へと転換したことは国語教育の世界ではコペルニクス的転回として知られています。安先生は，「先行研究ではその指導法が戦中も受け継がれていたとされているが，そうではない」と主張します。つまり，言葉の意味や読者が文章を読んで理解し得たことに拘る形象理論に基づく指導法が後退し，言葉の意味を問わず暗唱できるまで繰り返し読むという指導法が支持されるようになった，と言うのです。

では，いかにしてこの主張を裏づけたのでしょうか。その根拠資料になっているのが，著者が「東京都内の，とある古書店」（p. 284）で購入したという青いトランク鞄です。この中には，「1941（昭和16）年度に東京府青山師範学校附属国民学校に入学した一女児童が，一年生のときから四年生のときまでに残した学習資料約350点」（p. 284）が含まれていたそうです。この中，第一学年のヨミカタの試験と，この女児童の解答を対象にして，安先生は以下のように分析しています。

Ａ児は三か所を間違えたのみである。この試験も国定国語教科書『ヨミカタ

二』の五十八ページから八十五ページの文章ならびに国定国語教科書『コトバノオケイコ　二』の四十六ページから六十五ページの文章を丸暗記していないと解答できない。（改行）第一学年も終盤の試験になると記述式の設問が登場する。しかしそれも教科書本文を覚えていないと答えられないような問題である。第一学年に限って言えば基本的に，教科書本文を暗記していないとまったく解答できないのである。児童が素読・暗記を懸命に行って試験に臨んだ様子が目に浮かぶ。（p. 286）

当時の資料から形象理論に基づく読むことの学習指導が行われていた典型的な学校を特定した上で，その学校の児童の学習資料を発掘して戦中に指導法の転換があったことを検証しています。この作業に費やされたであろう労力に頭が下がると同時に，フィールドワークや実験となんら変わりない実証的な方法に強く感銘を受けました。

３．外国語を読むということについて

本書では主に，その当時の学者や実践家が書いた著作物が研究対象になっています。例えば，第３章「形象理論とウィリアム・ジェームズ」では，『国語の力』の有名な一文「雪片を手に執りて…」はどこから引用したのか，エドマンド・ヒューイからの孫引きか，ウィリアム・ジェームズの原典か，ジェームズだとすれば原著か訳書か，といった事実が丹念に検証されていきます。垣内松三は，教室に赴いて授業の記録をとり，それを素材に論文を書くという実証的方法を用いたことで高く評価されています。それでも，日々の研究活動の基礎は一冊の本を読むことにあったのだ，という事実に本章を読みながら思いをはせていました。

このように，一人の学者がどんな本を読み，それが新たな本を作り出すことにどう結びついていったのかが丹念に解き明かされていくことも本書の魅力です。それと同時に，一冊の本を読むことの難しさ，わけても外国語を読むことの難しさについても訴えるものがありました。

第１章「開発教授期の読み方教育」では，文章の全体的把握から出発する読むことの学習指導法（センテンス・メソッド）が定着する以前の時期が対象にされています。本章の問いを私なりに述べれば，「『国語の力』公刊以前にセンテンス・メソッドの考え方と方法は日本に紹介されていたにも関わらず，それが定着

しなかったのはなぜか」というものです。先に結論を言えば，国語教育の実践家・研究者にその思想を理解する土壌ができていなかったからです。この主張を支える根拠の一つとして，安先生は，若林虎三郎・白井毅が明治16年に公刊した『改正教授術』における誤りを指摘しています。以下の引用は，『改正教授術』の指導例にある大きい「い」と小さい「い」をそれぞれ生徒に読ませるという指導法について，アルファベットの大文字と小文字の区別を間違えたものだと指摘した箇所です。

> 『改正教授術』を著した若林虎三郎・白井毅は，*A Manual of Elementary Instruction* のこの箇所を誤読したと思われる。英語には小文字と大文字があり，ひとつのアルファベットでも二種類の文字を覚えなければならない。この「小さなカード」に記した「小文字」の部分を「小さな字」と誤解したのではないだろうか。そのため，右に記した視力検査のような奇妙な教授過程が生じたものと推察できる。（改行）この一例から結論づけるのは強引かもしれないが，『改正教授術』は *A Manual of Elementary Instruction* を翻案したにせよ，シェルドンの教育思想を十分に咀嚼したうえで上梓されたものとは言いがたい。そのためか「今日から見てひじょうに幼稚素朴なものであった。」という感を抱かせてしまう（p. 10）。

あなたは，この文を読んで笑いませんでしたか？私は笑いました。洋書を有難がって読み，意味もよく分からないまま翻訳し，もしかしたら「なぜ？」と頭にクエスチョンマークを抱えながらこの指導法を用いた先生がいたかもしれない，と想像したからです。でも本当は笑えません。なぜなら私も「洋書を有難がって読み，意味もよく分からないまま翻訳し，その指導法を紹介する」ことがあったからです。少し反省し，国語教育史に名前を残す人物ですら間違えるのだから，自分はなおのこと気をつけようと思った次第です。

4．研究者と実践家のコミュニケーション

第２章「形象理論の浸透背景」，第8章「国語教育におけるセンテンス・メソッドの考察」，第９章「垣内松三と飛騨教育会夏季国語教育講習会」では，なぜ国語教育界において形象理論が普及したのか，実践家は形象理論をどう捉えたのかと

いう問いが追究されています。

これらの章を読み，「個々の理論・実践を越えたところにその時代の思想があり，人はそこから否応なく影響を受けるのだなァ」，「どんなに言葉を尽くして説明しても理解してもらえる内容は限られているのだなァ」と思いました。

前者については，第２章と第８章において，（１）明治の頃より「児童は自ら学ぶことができる，という楽観的な児童観」（p. 30）が萌芽し，一部の研究者・実践家によってそうした児童の自学を基本とする自然な読み方の指導が行われ始めて，徐々に形象理論を受け入れる素地ができていったこと，（２）読みを構成する三要素（文章，作者，読者）の中，読者に力点を置く生命主義の国語教育論が隆盛したことによりその反動として文章と作者に力点を置く理論が求められていた状況，（３）直観重視の思想が形象理論ならびにその指導法であるセンテンス・メソッドと合致していたこと，以上３点が詳述されています。

一方，後者については，第９章において，垣内が実践家に向けて行った講義記録が正確に記録されていなかったことを根拠に，「形象理論の普及伝播において，必ずしも充分な理解が伴っていたとは言えないという思いが拭えない」（p. 154）と安先生はおっしゃっています。しかし，それと同時に，なんとか形象理論を理解しようとする実践家の声，そしてそれに応えようとする垣内の声も本章には含まれています。以下の引用は，実践家が垣内に読みの深まりをどう把握したら良いかを質問している場面です。

> 垣内先生に一つお尋ねしたいと思ひます。（改行）原現象を読んでゐるのか。原集積に止つてゐるのか之を自分で分ら(ママ)かすことは出来ないものでせうか。よく読んで分かつた時などは教材に対して敬虔な態度になつて，自然頭が下がることがありますが之が深く入つた証拠と思つて居りますがどんなものでございませう（p. 156）。

垣内は，この実践家の質問に対して，「作者と読者との間に同一性を期することは困難な問題です。」と前置きしたうえで，「敬虔の念にうたれるといふことも同一性の一つですし，感謝を付与されることも同一性の表れです」と答えたそうです。私は，この実践家と垣内のやり取りを読み，形象理論が普及したのは，決して時代の流れによるものだけでもなければ，『国語の力』一冊の影響によるものだ

けでもなく，こうした垣内と実践家の地道なコミュニケーションがあったからこそだと感じました。

５．真理は，言葉で直接に表現することはできない

ここまで，全く恣意的な取り上げ方をしてきましたが，最後に本書の核心となる部分に触れておきます。安先生の要約によれば，本書は「言葉の持つ本質的性格は（勝田注：この見出しのこと），哲学にとどまらず，実践的に言葉を扱う『国語教育』の中でも留意されてきたという史実を論証した」（p. 315）ものです。では，私たちはどのようにして真理を表現したり理解したりすれば良いのでしょうか。安先生は，比喩の一つ換喩であると主張し，形象理論ならびにこの理論に基づく読むことの学習指導の本質も換喩にある，と結論づけます。換喩とは，「二つの事物の隣接性に基づくレトリック」（p. 172）だそうです。例えば，童話の『赤ずきん』を思い出してみると良いかもしれません。

形象理論の本質が換喩にあることは，少なくとも私にとっては，本書を読んで初めて学んだことでした。その主張は，垣内が読んだ本と『国語の力』の関係が丹念に検討されていることからも説得力を持つように思いました。では，なぜ安先生は形象理論の本質が換喩にあると発見できたのでしょうか。もちろん，日々の誠実な研究活動の成果であることは疑いありませんが，それだけではないようです。安先生は，あとがきの中で，形象理論研究を始める前にたまたま見たテレビドラマ「スタートレック」のエピソードが印象深く記憶に残り続け，「『言葉とは比喩だ』という言語本質観が自分の深層にも胚胎」（p. 355）していたことを明かしています。

実を言うと，私にも同じような言語観を持つに至った，記憶に残り続けているエピソードがあります。おそらく，高橋源一郎さんが「なぜ文学は必要か」について書いたエッセイだったと記憶していますが，出典を見つけられませんでした。もしかすると，「高橋さんがこういうことを言っていると良いな」と勝手に作り出した記憶かもしれません。以下，私の記憶からの引用です。

> なぜ文学が必要か。こういうケースを考えてみて欲しい。クラスで一番人気の女の子がいる。アベもホリエも，みんな彼女のことが「好きだ」と言っている。だけど，みんな嘘つきで「本当に彼女のことが好き」なのは君だけだ。で

も彼女に他のやつは嘘つきで君だけが「本当に彼女のことを好き」だと言うことはできない。なぜならみんなそう言っているからだ。「みんな嘘つきで本当にあなたのことを好きなのは僕だけだ」と伝えても，彼女は信じてくれないだろう。では，どうやって伝えれば良いのか。ここに文学のことばが必要とされる理由がある。

このエピソードが私の記憶に残り続けていることもあり，国語教育の世界において最も有名な垣内松三の形象理論が「真理は，言葉で直接に表現することはできない」という言語観に基づき，多くの人に受け入れられてきたのだという事実を嬉しく思いました。ここまで読んでくださった方と，本書や形象理論について語り合える機会があることを願っています。

【書評・書誌情報】

安直哉著『国語教育における形象理論の生成と展開』

東洋館出版，2015年，5,400円（税込）